

令和元年度環境学習等推進協議会取りまとめ資料
(令和2年3月)

1. 環境学習等推進協議会での意見等から課題の整理
 2. 第四次計画の基本的な構成の検討 骨子案
 3. 事例紹介
-

1. 環境学習等推進協議会での意見等から課題の整理

【令和元年8月16日】

(1) 環境学習等推進協議会（第1回）での出された課題

- ・琵琶湖と触れる重要性
- ・教員の環境教育への意識向上の重要性
- ・学校と地域との連携の重要性
- ・コーディネータの重要性
- ・分野や立場をこえたつながりの重要性
- ・SDGsとESDの関係性の整理

【令和元年11月18日】

(2) 環境企画部会（第1回）での出された課題

- ・「遊ぶ」の要素を追加（環境学習の幅が広がる）
- ・子どもの生活が都会化する中で、人間らしさの担保
- ・災害等の環境変化の中で対応していく重要性
- ・課題を教え込むのではなく、問題発見（探究）型
- ・仲間と力を合わせて、自分の意志で動ける環境学習
- ・大人が自然を学び、体験すること

(3) 環境学習等推進協議会（第2回）での主な意見

「遊び」の要素を盛り込む

- ・今までの自然体験はあくまで学習。学ぶは置いておいて、純粹に遊ぶ、楽しむ、そして琵琶湖や自分の地域を好きになる、その愛着をまずは大切にすべき。その意味での体験やふれあうことの重要性とその目的を明示すべき。
- ・特に低学年の子どもの環境教育では遊びがなければいけない。五感を通した遊びの中で、自然に気づくことができる。環境教育では、環境の変化に敏感でなければならない。
- ・大人も遊ばないといけない。

「地域学習」を環境学習に位置づける

分野を越えた学習促進

- ・学校では琵琶湖とふれるということを経験学習としてされているが、これは環境学習でもある、という視点を学校側にもってもらえるような、アプローチができないか。
- ・ESDといえば、地域の課題から学習を進めるということでもあり、環境だけでなく、その周辺にある地域やまちづくりなど、積極的に環境学習の垣根を越えて相乗りしていくこと。地域学習は多様な分野間のつながりを考えるところでは、中心的な手法となるのではないか。
- ・ESDもそうだが、やっているのに、位置づけとしてそれが見えていないだけなのかもしれないので、見える化のためにも今回はできるだけ事例を入れていくとよいと思う。³

地域による学校支援の体制整備

- ・地域との連携の中で地域が学校を支援する必要がある。その時、学校教育と社会教育をつなぐコーディネータの役割が出てくる。社会教育法が変わって、各市町は地域協働活動を推進する体制を作ることになっている。

環境学習の持続性

- ・環境保全や学習支援を手弁当でやっているとは持続的でないので、経済とどうつなげていくかというところを考えなければならない。
- ・研修をされた環境学習支援士のような方が働ける場づくりが重要。

大人の関わり方が問われている

- ・高齢化社会になり、地域住民、大人に対しても重要になってくるので、改めて県民全体でやっていく必要がある。大人自身がより問われている。

国内・海外に広く伝える

- ・国際的な観点から特に途上国の方々に滋賀県の環境学習の経験等、学習の発信は重要
- ・海外だけでなく国内にも発信し、また他府県の優れた環境学習の事例を県内で紹介すべき

ギアモデルに軸が必要

- ・ギアは真ん中に軸がある。その軸がないとうまく回らない。そもそも琵琶湖が好き、琵琶湖に愛着を持っているというのは、ギアを回すための基本の軸にあたるもの。

【令和2年2月6日】

(4) 環境学習等推進協議会（第3回）での主な意見

地域学習と環境学習の関係

- ・地域が地域の子供に対して行う環境学習もあり、その一環として学校で行われる環境学習に協力することもある。地域と学校との連携について、「支援」から「協働」に変わっている。
- ・新しい学習指導要領のキーワードは教育課程を開くこと。
- ・地域コーディネータが環境学習や持続可能な社会について学ぶ機会があれば、そのような視点をもって、地域と学校をつなぐことができるのではないか。
- ・小学校区にあるまちづくり協議会と学校が協働するという軸もあってよいと思う。

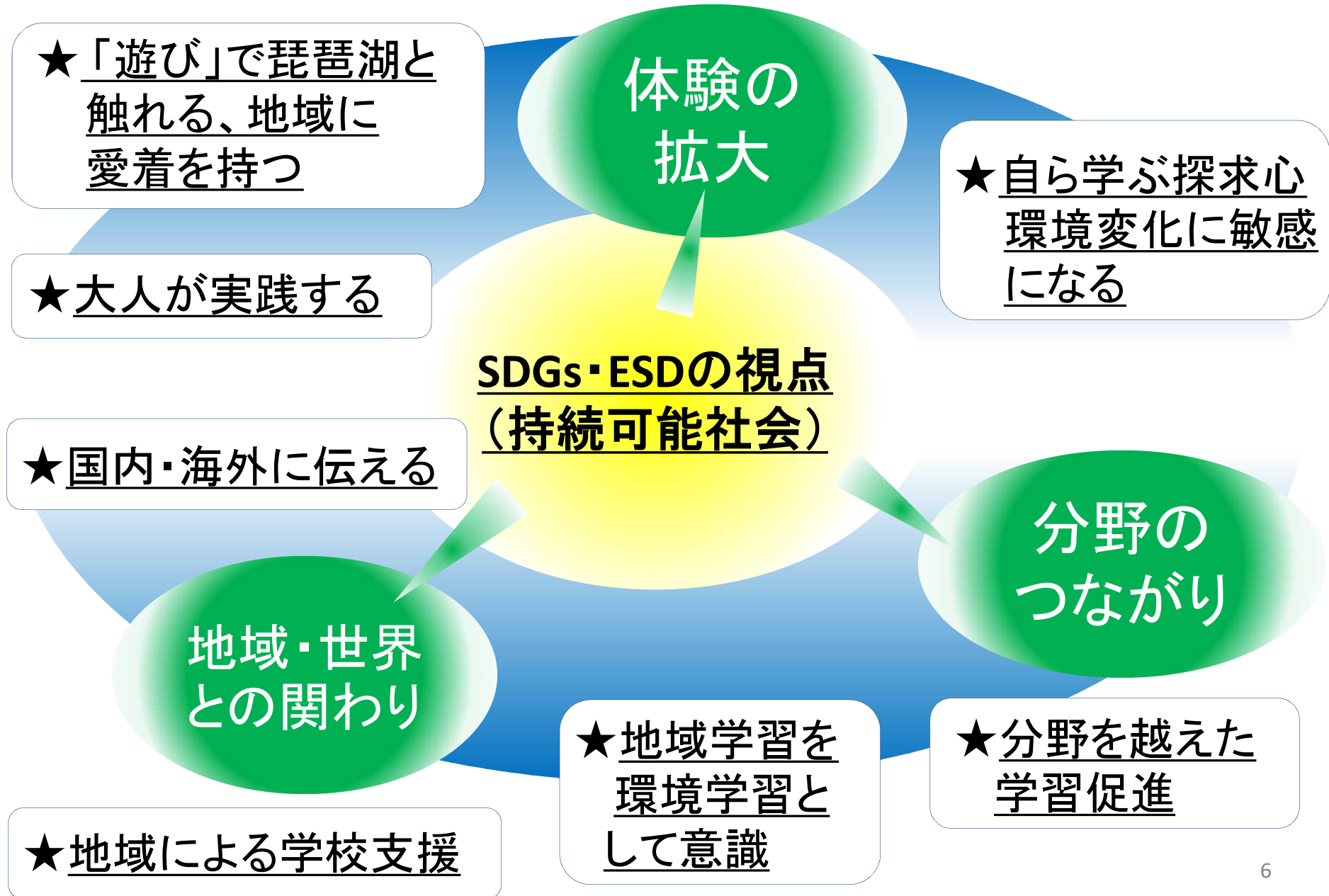
フローティングスクールの事前事後学習

- ・学習時間の確保が難しい。フローティングスクールの事前学習をどの学校でも行うことができれば、ある程度の環境学習の時間が確保できるのではないか。
- ・フローティングスクールを軸にカリキュラムマネジメントを進められないか。

事例紹介について

- ・県外の優良事例を学ぶことで、県の環境学習を良くしていくという部分を表現できないか。
- ・事例紹介のみならず、その事例を、滋賀県としてどう進めていくのか、検討する必要がある。

課題の整理



第三次滋賀県環境学習推進計画の改定の 基本的な方向性について

(1) 作業方針

第三次計画を基礎に、現在までの状況変化を反映した追加、アップデートを行いながら、現状の課題への対応方策について検討。

(2) 計画の性格

県環境学習条例の定める計画であると同時に、国の環境教育促進法に基づく「行動計画」への位置づけは継続

(3) 新たなコンテンツ

コラム等による具体的な活動事例を紹介

2. 第四次計画の基本的な構成の検討 骨子案

第2章 2. 環境学習をめぐる課題から求められるもの

【現行計画】 第2章 2. 環境学習をめぐる課題から求められるもの

- (1) リーダーの確保
- (2) 情報共有、周知のしくみづくり
- (3) 拠点、コーディネート機能の強化
- (4) 教育現場での学習時間確保やプログラムの工夫
- (5) 親・教員等へのサポート
- (6) 地域にある資源・素材の活用
- (7) 「つながり」の創出

【考え方】

現行計画の(1)～(7)は今日でも環境学習をめぐる課題から求められるものである。そこで、各課題の記述について、環境学習等推進協議会の意見(課題の整理)を基に、ブラッシュアップし、再整理する。
(課題を掘り下げる)

第2章 2. 環境学習をめぐる課題から求められるもの

【変更案】

新(1) 原体験として自然に触れ、普段から自然と関わる

- ・遊びの要素を取り入れた原体験を通じ、子どもから大人まで森川里湖に愛着を持ち、普段から自然に関わることが必要。さらに実体験から自ら学ぶ探求心や環境変化への対応力を高めることも必要。
- ・体験の内容は自然体験のみならず、生活体験、社会体験、人との交流体験なども重要で、体験の機会を広げていくことが求められる。

新(2) 「地域学習」の中で、人と自然とのつながりに気づく

- ・郷土への誇りや愛着心を育てる「地域学習」を環境学習の一環として意識し、学習の中で人と人、人と地域、人と自然などのつながりに気づくことが必要。
- ・学校での学習時間確保とともに、地域と学校との連携・協働による環境学習の推進が求められる。

新(3) 分野間の関係性に気づき、分野を越えて取り組む

- ・森川里湖といった自然環境のつながり、また環境と経済・社会活動とのつながりに気づくことが必要。
- ・気候変動の課題を含め、分野間の関係性を認識し、分野を越えて連携するためのコーディネートが求められる。(自然環境に加えて食や農、産業、消費生活など、暮らしを取り囲む様々な分野を想定)

新(4) 持続可能な社会づくりを支える人材が育つ

- ・活動者の高齢化や固定化の中、持続可能な社会づくりを支える新たな人材の発掘や育成が必要。
- ・そういった人材が、県内各地で継続的に活動できるよう、情報提供や場づくり等が求められる。

新(5) 世界を視野に、琵琶湖の経験を伝え、学びあう

- ・県内外のさまざまな地域・国で環境学習が展開。過去の経験、課題や先進事例の共有は必要。
- ・県内のみならず、国内・海外へも琵琶湖での経験を発信するとともに、先進事例の収集が求められる。

第2章 2. 環境学習をめぐる課題から求められるもの

【現行計画】

(変更案番号)

- (1) リーダーの確保 -----> 新(4)
- (2) 情報共有、周知のしくみづくり ----> 新(5)
- (3) 拠点、コーディネート機能の強化 ----> 新(3)
- (4) 教育現場での学習時間確保や
プログラムの工夫 -> 新(2)
- (5) 親・教員等へのサポート -----> 新(1)
- (6) 地域にある資源・素材の活用 ----> 新(2)
- (7) 「つながり」の創出 -----> 新(2)(3)(5)

【変更案】

- 新(1) 原体験として自然に触れ、
普段から自然と関わる
- 新(2) 「地域学習」の中で、人と
自然とのつながりに気づく
- 新(3) 分野間の関係性に気づき、
分野を越えて取り組む
- 新(4) 持続可能な社会づくりを
支える人材が育つ
- 新(5) 世界を視野に、琵琶湖の
経験を伝え、学びあう

第3章 計画のめざすもの 1. 基本理念

【現行】

- (1) すべての県民が協働と連携により取り組む
- (2) 多様な要素を多角的にとらえ、体系的、総合的に進める
- (3) 生涯にわたって段階的・継続的に取り組む
- (4) 体験の重要性を認識する
- (5) 日常の生活の場である地域に根ざし、地域の特徴を生かす
- (6) 地球全体の環境への理解とその関わりについての意識を持つ

【考え方】

「滋賀県環境学習推進条例」に規定する6つの基本理念（現行の理念）を継続する

第3章 計画のめざすもの 2. 基本目標

【現行】

「いのち」に共感して自ら行動できる人育てによる、持続可能な社会づくり

【考え方】

この文言は第四次環境総合計画の目指すべき将来像「めぐみ豊かな環境といのちへの共感を育む社会の実現」とのリンク。

第五次環境総合計画の「目指す将来の姿」は、

「琵琶湖をとりまく環境の恵みと いのちを育む
持続可能で活力あふれる循環共生型社会」

【変更案】



目標としてどのような人育てを目指すか…

地域を愛し、自ら行動できる人育てによる、

「いのち」がつながる持続可能な社会づくり

第4章 1. 基本的な視点

【現行】

○「つなぐ・つなげる」で「つながる」環境学習

- (1) 一人ひとりの暮らしと環境課題をつなぐ ※環境学習の展開例
- (2) 人々をつなげるリーダーを育てる
- (3) 多様な課題をつなげる
- (4) 異なる世代をつなげる
- (5) 学びを体系的につなげる
- (6) 地域課題の解決へとつなげる
- (7) 滋賀県がまるごとつながる

【考え方】

上記の基本的な視点は、現行計画の第2章.2課題を「つなぐ」というキーワードでリライトしたもの。「つながる」のキーワードを継続しつつ、協議会等でキーワードとして挙げられた「遊び」や「地域」などの視点から柱を整理する

第4章 1. 基本的な視点

【変更案】

○遊び、親しみ、「体験する」環境学習

- ・生活スタイルが多様化する今日、自分に合った方法で琵琶湖をはじめ身近な自然や地域の良さにふれあうことが重要。まずは森川里湖など自然フィールドで遊び、自然と親しむことや、自然や地域への愛着心を養うことが求められている。また、体験の中で環境変化に敏感になり、対応する力を高めていく必要がある。

○分野を越えて、「つながる」環境学習

- ・多様な課題に対応するため、様々な主体等の分野を越えたつながりを意識し、つながりの輪を広げていく必要がある(現行計画の継続)

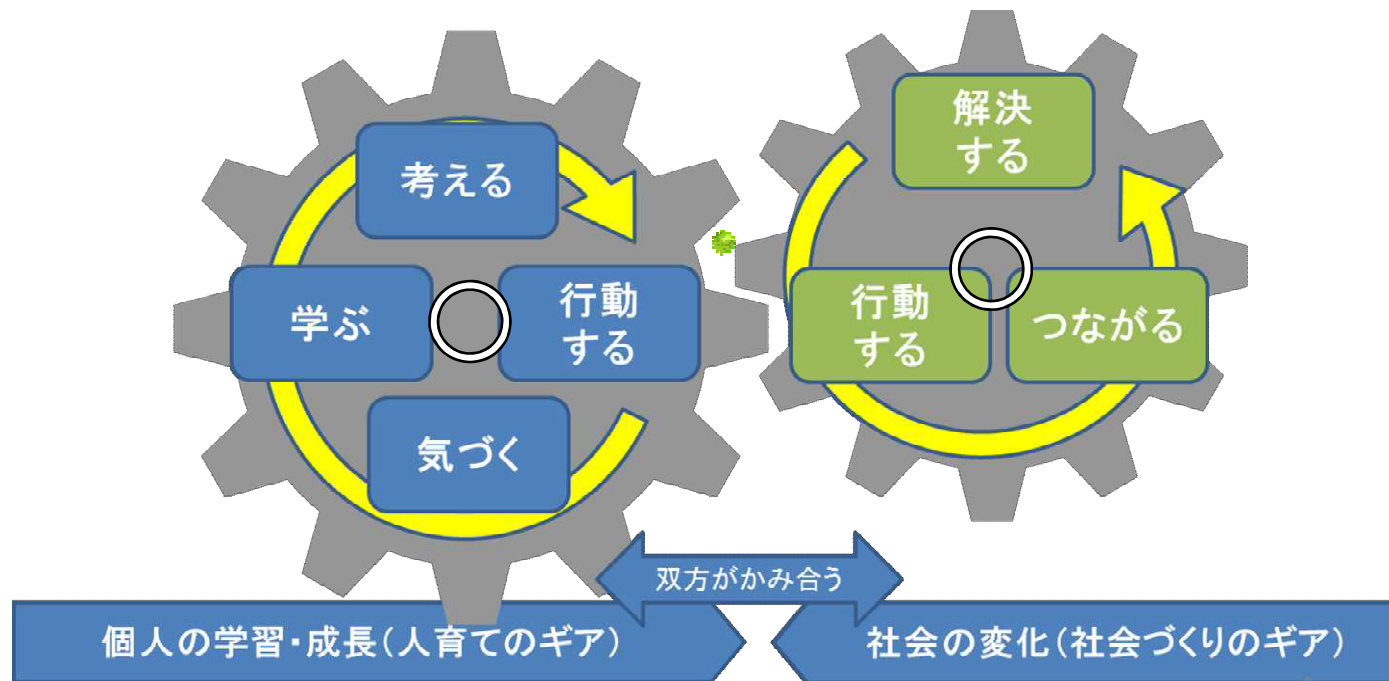
○世界を視野に、「地域から取り組む」環境学習

- ・気候変動を含め地球規模の課題を認識しながら、身近な地域や家庭、学校等で、自分に何ができるのかを考え、自ら実践し、社会づくりに参画する必要がある。

第4章 2. 取組の方法

【ギアモデルについて】

- ・ギアモデルのイメージ図は変更しないが、説明には人づくりと社会づくりのギアに地域への「愛着心」の軸(ギアがブレないための要素)について追記。
- ・また、関心の薄い方もギアモデル(環境学習)に関わる人の裾野を広げるため、「遊ぶ・親しむ」の入り口(きっかけ)も追記。



地域への「愛着」はギアモデルがぶれないための軸。→ その愛着が地域を守る行動力につながる

自分のライフスタイルに合った方法で、まずは「遊び」から関わる
→ 最初の1歩

第4章 3. 各主体に求められる展開方向

【現行】

- | | |
|---------------|----------------|
| (1) 県民(個人) | 【求められる活動例】 |
| (2) NPO・地域団体等 | 【求められる活動例】 |
| (3) 学校等 | 【求められる活動例】 |
| (4) 事業者 | 【求められる活動例】 |
| (5) 行政 | 【求められる活動例】 |
| コラム | 【食を切り口とした環境学習】 |

【考え方】

現状や課題に沿って、各主体に求められる展開方向をリライト
求められる活動例に、写真を入れて具体的な事例を入れて紹介

(例えば)

- | | |
|-----------|---------------------------|
| 県民 | ・・・ 食品ロス、フードバンク |
| NPO・地域団体等 | ・・・ ふるさと絵図づくり |
| 学校等 | ・・・ カリキュラム・マネジメント |
| 事業者 | ・・・ 企業による生物多様性保全の取組 |
| 行政 | ・・・ SDGsリーダー研修、海外への環境学習支援 |



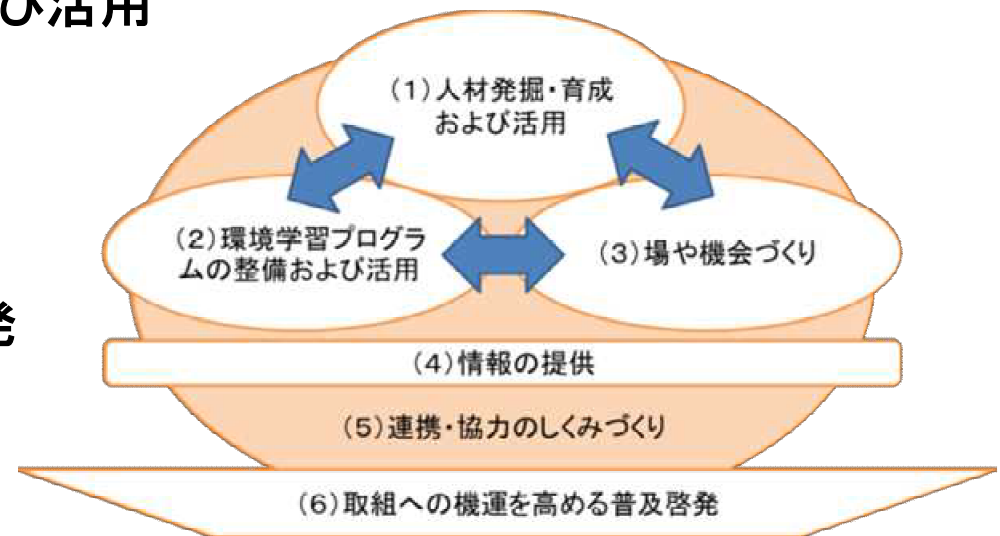
スライド番号
(24～28)

第4章 4. 県の施策の展開方向

【現行】

- (1) 人材育成および活用
- (2) 環境学習プログラムの整備および活用
- (3) 場や機会づくり
- (4) 情報の提供
- (5) 連携・協力のしくみづくり
- (6) 取組への気運を高める普及啓発

※ギアモデルとの関連性を記載



【考え方】

施策展開は現行計画の柱を継続
ギアモデルとの関係表については見直し

第5章 重点的な取組 1.重点的に取り組む分野

【現行】

- ①「暮らしと琵琶湖のつながり再生」についての学習推進
- ②「低炭素社会づくり」についての学習推進
- ③「生物多様性の保全」についての学習推進
- ④「循環型社会づくり」についての学習推進

※ギアモデルとの関連性を記載

【考え方】

- ・森川里湖のつながりが重要。重点的な取り組む分野に
県面積の1/2を占める「森林」の記載がないため、「森林」を追加。
- ・ギアモデルのステップとの関係性は見直し。
- ・分野間のつながりに気づき、分野を越えて取り組むことが必要。

第5章 重点的な取組 1.重点的に取り組む分野

【変更案】

1.重点的な取組 1. 分野をつなぐ

(1)重点分野

- ①「暮らしと琵琶湖のつながり再生」についての学習推進
- ②「低炭素社会づくり」についての学習推進
- ③「生物多様性の保全」についての学習推進
- ④「循環型社会づくり」についての学習推進
- ⑤「多面的機能をもつ森林づくり」についての学習推進

(2)分野をつなぐ

分野の関連性についての具体的な事例を記載

【考え方】

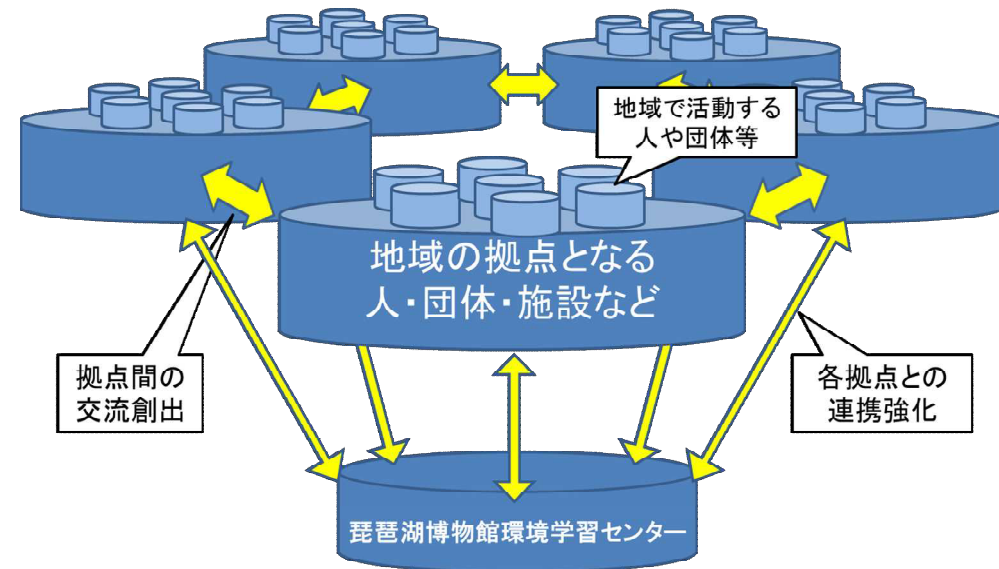
- ・「多面的機能をもつ森林づくり」についての学習推進を追加。
- ・分野間のつながり等の具体的な事例を掲載する。

第5章 重点的な取組 2.環境学習の推進に向けた「つながりの強化」

【現行】

2.環境学習の推進に向けた 「つながり」の強化

- ①拠点となる人、団体、施設などの「つながり」強化
- ②学校や幼児教育の場と、地域との「つながり」強化



【考え方】

- ・「つながり」は引き続き計画の重要なキーワード。
- ・つながるためには、ビジョンの共有が必要

第6章 施策の効果的な実施のための推進体制

【現行】

1. 施策の総合的な展開
2. 環境学習支援機能の充実
3. 協働による推進
 - (1) 県民、NPO・地域団体、事業者等との協働
 - (2) 市町との連携
 - (3) 環境学習関連機関・団体・施設等との連携
 - (4) 国および他の自治体との広域連携

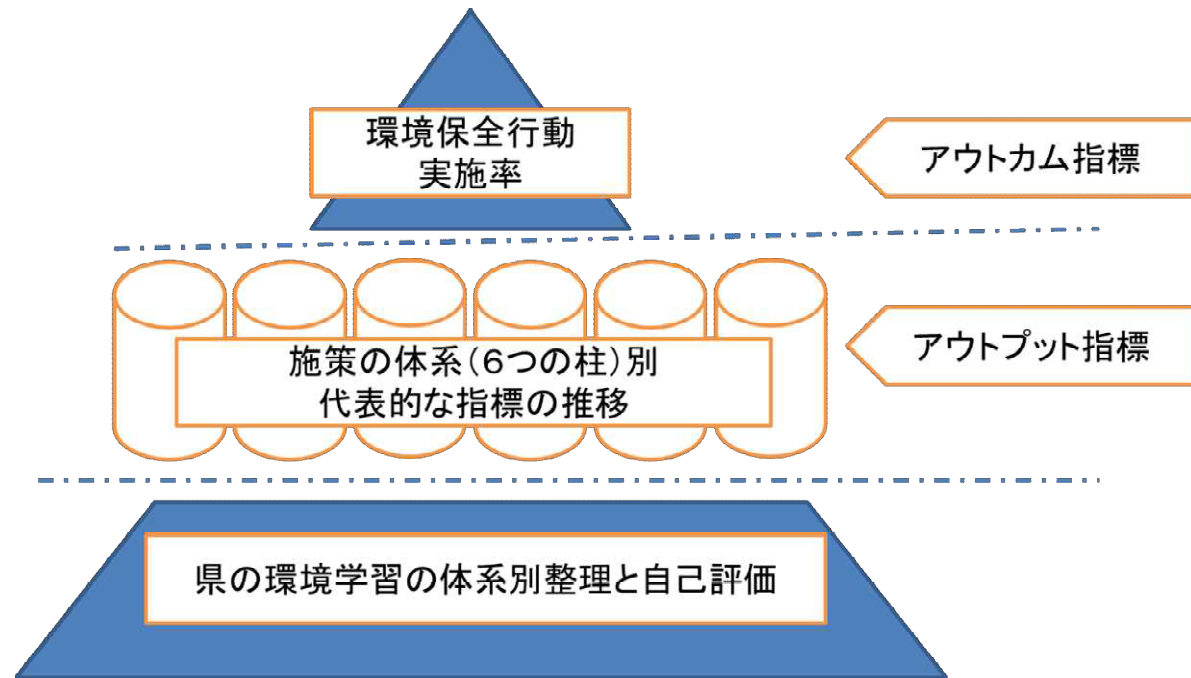
【考え方】

各主体の協働・連携の方向性を継続

第7章 計画の進行管理

【現行】

1. 進行管理の考え方
2. 進行管理の手法



【考え方】

- ・環境学習等推進協議会の役割等を明記する
- ・第三次計画で、アウトカム指標を加えた進行管理手法に変更。第四次計画でもこの方法は継続。
- ・県内外の優良事例の収集に努める。

3. 事例紹介

県内事例 1 一地域を教材に活用

集落や地域を対象として、そこに生きる一人ひとりの心に息づく思い出を集めて描く、ものがたり絵図。

「ふるさと絵屏風」

- ・身近な自然や環境を学習教材として活用することで、その学びを地域づくりや地域の抱える課題解決へと生かしていくことができる
- ・自分たちの地域を知ることは、郷土への誇りや愛着心を育てることにつながる



「土山町山内ふるさと絵屏風」



生き物絵図「草津市立澁川小学校」

県内事例 2ーカリキュラム・マネジメント

ゼロエネルギー化を目指す学校として、平成25年、文科省は守山中学校を「スーパーエコスクール」に認定。平成28年に自然の力を活用するなど工夫された新校舎が完成

「スーパーエコスクール守山中学校の取組」

滋賀県地球温暖化防止活動推進センター(淡海環境保全財団)

・新校舎を活用したエネルギーに関する学びのみならず、総合的な学習の時間や特別活動、道徳教育などの場において、地球温暖化、エネルギー、ごみ問題、自然と生き物など、様々なテーマを対象として、環境教育の視点をもった授業を体系的に展開。

・地球温暖化に関する環境学習では、県地球温暖化防止活動推進センターが授業を担当し、学年ごとに独自のプログラムを実施。

・全学年を対象に毎年と卒業時にアンケート調査を実施し、環境学習が生徒たちにもたらした変化(知識、意識、行動)を把握し、その成果を取りまとめた。



1年生:あっとホーム



2年生:こだわりカレーの作り方



3年生:どこからどこへ



公開セミナー「スーパーエコスクール守山中学校での取り組みから見えてきたものとは」

(出典 2019.12発行 明日の淡海vol.29

・守山市立守山中学校3か年における体系的な環境学習調査報告書)

県内事例3 ー企業による生物多様性保全の取組

滋賀経済同友会に加盟する湖南地域の企業を中心とした17社による組織。

「湖南 企業いきもの応援団」

各企業の特性を生かした業務・活動の一環で、地元の身近な河川である「狼川」をフィールドとした生物・環境調査を2010年度から開始。近年は小学校や自治会などを通じて地域をつなぐ活動へと展開

【内容】

- ・狼川の上流から下流にかけて設けられた6ポイントの調査地を、各企業が分担して担当し、年4回、水質および生き物調査を実施
- ・草津市立南笠東小学校の「総合的な学習の時間（狼川学習）」への出前講座や、学校に展示用の生き物を提供し、校内の「狼川水族館」を支援
- ・同小の夏休みの「地域公開講座」では、地域の方と一緒に狼川の生き物調べを行い、いきもの応援団が魚や水生生物の種類を教えている



(出典: 湖南企業いきもの応援団 活動報告書 Vol.4 2016～2017年度)

県内事例 4 –SDGsリーダーの育成

地域循環共生圏の形成と各地域におけるSDGsの達成を目指して、主体的に地域課題解決に取り組む次世代リーダーを養成する環境省主催の研修

「持続可能な地域の未来づくりに向けたSDGsリーダー研修」

(環境省)

○自治体・企業・NPO等に勤務する
社会人を対象に、東近江市で、
令和元年11月8日～10日開催

【講演】

- ・地域特性の解釈と活用
～地域診断法とコミュニティ・ビジネス
- ・関係人口のつくり方
～ぼくらは地方で幸せを見つける
- ・ESG地域金融の取り組み
～地域循環共生圏を目指してから
- ・豊かな地域資源と住民をつなぐ
東近江市のまちづくり
～東近江三方よし基金の事例から

プログラム

11/8 金 13:15～18:45

- ガイダンス
- 講座
- 視察&ディスカッション
- 懇親会等

 講師 指出一正
月刊『アウトコト』
編集長。

 講師 龍崎 修
滋賀県立大学
准教授。
専門：地域活性化、環境共生まちづくり、
コミュニティ・ビジネス

11/9 土 9:00～18:15

- 視察&ディスカッション
- 講座
- グループワーク等

11/10 日 9:00～12:30


- 研修成果発表会等

11/9 視察 & ディスカッション内容
(視察希望先ごとにグループに分かれます)

A. 持続可能な組織づくり
先駆的なSDGs経営組織に学び、持続可能な組織運営のあり方を考えます。



B. 地域資源を活かした仲間づくり
地域資源や市民資金を活かした、農林業の高付加価値化について考えます。



(出典: 持続可能な地域の未来づくりに向けた
SDGsリーダー研修 資料より)

県内事例5ー海外への環境教育支援

「さくらサイエンスプラン - 湖南省教育関係者との交流」

さくらサイエンスプラン(JST支援)を通じて、湖南師範大学附属小中学校の教員等が招へいされ、滋賀県の環境保全の取組等を学ぶ交流事業を実施 (H27~H30年度)。

(国際湖沼環境委員会)



事業では、琵琶湖博物館、琵琶湖環境科学研究センターへの訪問をはじめ、県内学校との交流や環境学習に関する講義が行われ、湖南省の環境教育に貢献。

「湖南省洞庭湖流域農村水環境改善プロジェクト」

琵琶湖の保全を通して汚水処理、環境配慮型農業、環境教育等の分野で産官学民が協働して取り組んだ経験、ノウハウを持つ滋賀県が、湖南省の取り組みを支援。

(淡海環境保全財団)



当事業は、都市部で進めてきた汚水処理場の運転管理能力向上の取り組みを、農村部を含む省内に普及させるもの。また、農村での環境教育のための教育プログラムを作成するなど、住民環境意識の向上にも取り組まれた。

(出典:2019.9発行 明日の淡海vol.28)

小学生「水環境ポスターコンクール」を実施